

# わいるとらいふ

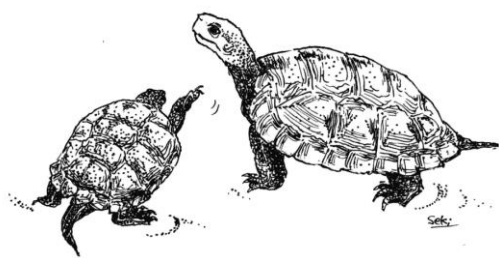
Wildlife

No.49

2020年7月15日

NPO法人 宮崎野生動物研究会

Miyazaki Wildlife Research Group



ニホンイシガメの求愛：関

## アカウミガメ卵の移植・稚ガメ放流会に関する提言

最近、アカウミガメ卵の移植あるいは、稚ガメの放流会実施に対する全国的な批判が高まっています。そのため、宮崎野生動物研究会では、ここ2・3年、移植は極力しない方向での調査を実施しています。

この問題についての各種文献内容や批判を下記のようにまとめましたので、調査員の方はご一読いただき、上記方向性について十分ご理解をお願いいたします。実際に文献をご入用の方はお問合せ下さい。

なお、新富町、高鍋町、また今年度から日南市では、波で卵巣が流されたり、草の根の巻き付き等によりふ化が危ぶまれたりする卵巣以外は、移植しないようお願いしてきたところです。また放流会は行わないことにしています。

### 【移植】

- ① 基本的に、移植をするとふ化率は下がる。
- ② 孵化場の環境によっては、性決定を偏らせる。29.7度を境に上ではメス、下ではオスになる。性決定は、発生期間中35-70%の時期（大体20~40日）で進んでいる。
- ③ 移植実施が産卵後12時間より前と後とで、胚の死亡率が上がる（12時間後の移植で胚の死亡率は一番低くなる）。
- ④ 磁場が、索餌海域、回遊に影響する可能性が高い。磁場への胚発生上の対応は、産卵直後から始まり1週間~10日の間に完成する。この研究については現在、NPO法人エバーラスティング・ネイチャー（ELNA）菅沼氏らが宮崎で実施中である。これが検証されると、配慮が十分でない移植は、宮崎へ回帰しないカメを生

む可能性が高い。

- ⑤ 移植は、非常に注意深く行う必要がある。すなわち、水平方向、垂直方法の回転を掛けないように（実際はかなり難しい）。

### 【放流】

- ① フレンジー（ふ化後の活性期）は約2時間しか続かない。その後、徐々に活性が落ちていく。すなわち、2時間の間に沖に到達しなくてはならない。もし放流会のために幼体の保管を行うと、弱ってしまい、海辺に待っている捕食者の餌食となる。
- ② 放流会は、捕食者を波打ち際におびき寄せる効果を持っている。
- ③ 昼間の放流は著しく幼体の体力を消耗させる。肉食魚などへの撒き餌状態となっている。
- ④ 水産庁の許可は調査者のみに与えられている。参加者（見学者）たちにカメを触らせてはならない。

### 【批判】

- ・宮崎県の放流会は全国的な批判にさらされている（「うみひろも」等）。
- ・移植は食害から守るためという理由づけもあるが、キツネやタヌキの食害に対しては、卵巣の上にプラスチックの網を乗せるなどで対応するのがよい。

※以上の内容について、宮崎野生動物研究会メーリングリストに流しました（2020年5月23日）

## 第5回九州山地カモシカ特別調査の報告

平成30(2018)年度と令和元(2019)年度の2年間にわたって、第5回九州山地カモシカ特別調査が実施されましたので、その結果を簡単に報告します。なお、現地調査においては、本研究会の多くのメンバーの方にご参加いただきました。お礼申し上げます。

特別調査は、ほぼ8年ごとに全国のカモシカ生息地で実施されています。九州での第4回特別調査は2011年～2012年にかけて行われました。今回の特別調査は大分県、熊本県、宮崎県3県が同時に行い、報告書は3県が合同で作成しました。

### 【調査方法】

調査は、調査隊が、カモシカが生息していると思われる山塊に出かけ、そこで方形区(調査員一人が5m幅を探索するので、5m×調査距離に調査人数を掛けた面積となる)を設置して、その中でカモシカの糞塊数を数えるという方法で行われます。糞塊密度からカモシカ密度を推定する方法は、糞塊法と呼ばれます。全国のうち九州山地と四国山地はこの方法による調査が行われています。また、方形区調査が行われた場所については、植物班による詳細な植生調査も行われました。また、糞はDNA分析でカモシカの糞かシカの糞かが判定されます。

今回から初めて、センサーカメラによる撮影による調査方法が採用されました。センサーカメラによる撮影ではカモシカ密度は推定できませんが、その地域にカモシカが生息しているかどうか判定できます。生息数の推定にはこの結果も活用されました。

### 【調査結果】

図1に第2回から今回の特別調査までの九州3県の推定生息数を示しました。第2回調査時には多く見積もって2200頭近くのカモシカの生息数でしたが、その後急激に減少し、さらに今回は最低のほぼ200頭と

いう推定生息数になってしまいました。前回(第4回)の推定数が約800頭でしたので、前回からわずか8年間で、1/4近くに減少してしまったことになります。減少の最も大きな要因は、シカによる林内の下層植生の破壊だと思われます。草本層は2000年頃に急激に衰退しましたが、今回はそれに輪をかけるように、灌木層の植生も大きく破壊されていました。すなわち、現在カモシカの餌となる植物がほとんど林内にないため、カモシカが生きていけないようになっているのだと考えられます。

もう一つの大きな変化は、高標高地(祖母、傾、大崩山系等)ではカモシカがほとんど棲んでいなくて、多少密度高く生息しているのは、中標高地(400m～800m)だという傾向も明らかになりました。高標高地では、下層植生のシカによる食害がより深刻となっているからだと思われます。

他に、カモシカにとっての厳しい状況は、シカを捕獲するためのくくりわなによる錯誤捕獲、シカの食害を防ぐために設置された防鹿柵への絡み事故による死亡、疥癬による死亡等などがあります。今後、抜本的な方策を九州3県が協力して採っていかない限り、九州におけるカモシカは近い将来に絶滅してしまう可能性が高いという、危機感を大いに募らせる結果となりました。

岩本 俊孝

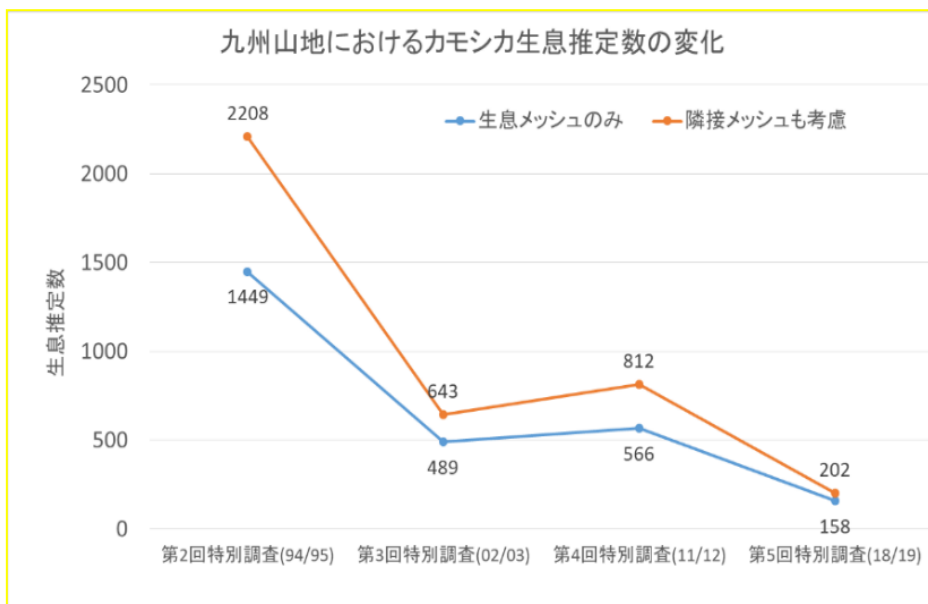


図1 カモシカ生息推定数の変化

## フタコブラクダの大事件

ある日、朝からフタコブラクダの放飼場が騒がしかった。大きなオスが園内を走り回り次々と仲間の足をかむ、そのたびに「ギャー」と悲鳴が聞こえてきた。フタコブラクダの野生種は中国奥地のモンゴル、トルキスタンにわずか残るだけで国際保護動物に指定されているが、ラクダは紀元前から家畜化され砂漠で生活する人たちの有用な動物とされてきたなじみの動物で、動物園で飼育されているのは早くから家畜化したものである。寒暖の激しい地方では夏は40度以上、冬はマイナス30度とそれに一日の寒暖差も大きく、また砂漠の厳しい砂嵐にも平気で対応するために冬は全身を長い毛で包み、夏は首と頭部を残し毛が生え替わり短くなる。また砂嵐から守るためには鼻の穴が開閉出来るようになっている。それにもう一つの特徴として、彼等は砂漠の中で長時間水分を飲まなくても平気なように背中に大きなコブがある。そこで昔の人たちはあのコブの中には水が貯えられているのだと思っていた。でもそれは間違いで袋の中は脂肪がつまりそれが栄養分で10日ぐらいは平気で生きることが出来る仕組みになっている。

大人になるとオスは体重800kgにもなるし、それを支えるように足の裏にも秘密がある。

その日の午後のことだった。「ウエー、ウエー」聞き慣れない大きな悲鳴が聞こえてきた。慌てて外に出てみるとそこには大きなラクダがモートと言われる観客席の間の狭い溝に逆さに転落しているのを発見した。「これは一大事」と私は直ちに飼育係員を集めると対策を練った。ラクダ同士の争いで追い落とされ溝に落ちたラクダは足が絡み合い、身動きとれない状態だった。そこでまずは、ロープを持ってくると腹の下に通し2tクレーンを使って動かしてみたがロープは腹の中に食い込むばかりで重い体を動かすことが出来なかった。

足が岩に絡み折れているかもしれなかった。ただ、痛いのか頭を岩にぶつけるので血だらけになった。逆さになっているのをまず座らせようと思ったが溝が狭く、動くことさえ出来ず、ただ大きな声で悲鳴を上げるばかりお客も集まってきて私たちの救出作業を見つめているだけだった。そこで溝を埋めるために餌の乾草を運ばせて、その隙間を詰めることにした。重い頭を首からクレーンでつるし隙間に次々と乾草を詰めていった。この作戦がうまく行き少し体の一部が持ち上がり3時間ほどでやっと正座させることが出来た。心配していた足の骨折も無く私たちはほっとした。足がしびれていたのかすぐにはたてなかったがしばらくして自分で立ち上がり運動場に戻ることが出来た。どこからと無く観客からの拍手が響いた。

竹下 完



溝にはまったフタコブラクダ



## 宮崎県初記録のウミウサギガイ科

宮崎県で記録されている貝は、陸産・淡水産・海産を合わせて1,700種以上です。確認はされていますが記録されていない海産貝も数十種ありますし、海産貝は調査がまだまだ不十分ですので、2,000種を超えるのも時間の問題だと思います。

今回は最近見つかった宮崎県初記録のウミウサギガイ科の貝をいくつか紹介します。

一つ目は博物館友の会の中島沙於吏さんが宮崎市の海岸で見つけた貝でヒガイという貝です。亜種にツマベニヒガイがありますが、大人の貝ではないので、どちらかははっきり分かりません。



図1. ヒガイ

この種は、宮崎県ではこの1個体しか確認されていません。

中島さんは、貝の中でもウミウサギガイ科が好きで、貝殻拾いに時々出かけられるようです。



図2. ヒナコダマウサギ

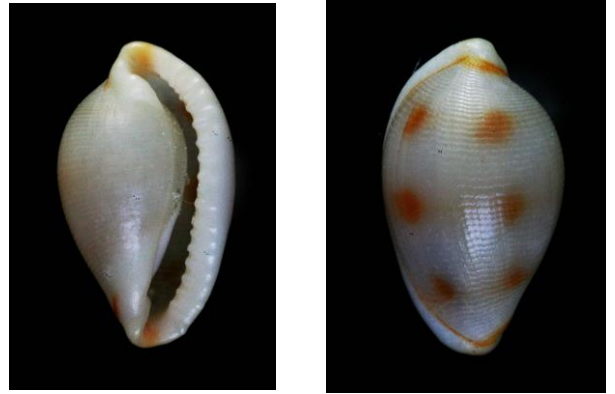


図3. ホソテンロクケボリ

ヒナコダマウサギもホソテンロクケボリも何かにはいていませんか？タカラガイに似ていますね。ウミウサギガイ科はタカラガイ科に近い仲間です。テンロクは点六で斑紋が6個あることに由来します。

同じ博物館友の会の八木真紀子さんも貝が好きで、ウミウサギガイ科の貝を採集しておられます。



図4. ホリキヌツツミ

ホリキヌツツミも宮崎県初記録はもちろん、宮崎県ではこの1個体しか見つかっていません。

ウミウサギガイ科の貝は似たものも多く、見分けるのが難しいです。今回紹介したホソテンロクケボリによく似たものにテンロクケボリというものがあります。生きているものを見ると、体の模様が全く違うので別の種類とすぐに分かるのですが、殻ではテンロクケボリなのかホソテンロクケボリなのか判断が非常に難しいです。

貝殻拾いは一年中できるので楽しいですよ。砂浜と岩場が両方あるところに行けば、砂浜に棲む貝と岩場に棲む貝の両方がいるので、いろいろな種類の貝殻が拾えます。

西 邦雄

## 野生動物の保護 ～ムササビの幼獣～

動物園では、野生動物の保護を受け入れることがあります。私もこれまで、たくさんの動物に接する機会がありました。その中で、今回は（大まかに分類して）今年の干支の仲間、ムササビが保護された時の経験をご紹介します。

ムササビは日本の固有種で、本州以南に生息する夜行性の動物です。テレビなどでも紹介されるように、前肢から後肢、後肢から尾にかけてついている飛膜を広げて、木から木へ滑空することができます。

2016年10月、ムササビの幼獣(こども)が動物園に保護されてきました。宮崎県内の資材置き場にあるH鋼の中で発見されたとのこと。本来、大木の樹洞や時には人家の屋根裏などを巣として利用



するので、この仔の親はH鋼を安全な場所として選んでしまったようでした。

動物園にきた時の体重は196g。オスで目は開いており、歯も生え始めていました。ムササビは生後28～36日で目が開くといわれているため、この個体は生後1か月程度と考えられました。

幼いうちは体温調整を自分ですることができないので、体が冷えないように温度調整ができる保育器のようなものに入れます。排便、排尿も自分ではできないので、湿ったティッシュなどで肛門を刺激して排泄を促しました。

まだ固形のエサは食べられないため、ミルクとして牛乳を人肌に温め、仔猫用の哺乳瓶を使って与えます。哺乳瓶に慣れるまでは嫌がるそぶりがありましたが、慣れてくると自ら吸い付くようになりました。

心配だった下痢や、特に体調を崩すこともなく成長し、日に日に活発になっていきました。体を特別温めなくても大丈夫になり、排泄が自分で行えるようになり、固形のエサも食べられるようになってくると、徐々にミルクの量を減らしていき、保護されてから80日目には完全に離乳しました。

現在は、動物園のこども動物村展示館にいますが、残念ながら建物内で3密を避けるためご覧いただくことができません。昼間は寝てばかりいますが、心配なくご覧になれるようになったら是非、会いに来てください。

古根村 幸恵





## 外来種ハイイロゴケグモの報告

### 1 調査の目的・場所

平成 18 年度頃から県内で生息しはじめた特定外来生物ハイイロゴケグモについて、どのような場所を、どのような方法で調べれば、生態や繁殖の全容が分かるか、事前の情報がある日向市の細島港と佐土原町の石崎工業団地、日南市の油津港について調査をした。

### 2 調査内容

ハイイロゴケグモが好んで生息しそうな場所を特定し、その周辺を調べ、生息範囲や生息する条件を見出すこととした。

### 3 調査方法

発見された成体や形状が特徴的な卵のうを手がかりに、クモが好む場所の特徴を明らかにすることにした。特に消火栓の扉を開けると産んだばかりの卵のうとそれを守る親グモが見つかったり、窓枠の下で卵のうを守っていたりしているクモが発見されることが分かった。また、殺虫剤で親グモを駆除し、生まれる前の卵のうを踏みつぶすことで、今後の防除になると確信した。しかし、駆除した同じ場所に別の個体が巣を作り(写真6)、卵のうを産むようであるので、駆除・防除の方法に工夫が必要である。

### 4 調査結果

黒化型のハイイロゴケグモ(写真1)を細島の工場で見つけた。この地域は以前セアカゴケグモがいたと言われていたが、黒化型のハイイロゴケグモと見間違えていた可能性があるように思った。隣接し



写真1 黒化型のハイイロゴケグモ、下は腹側からの写真

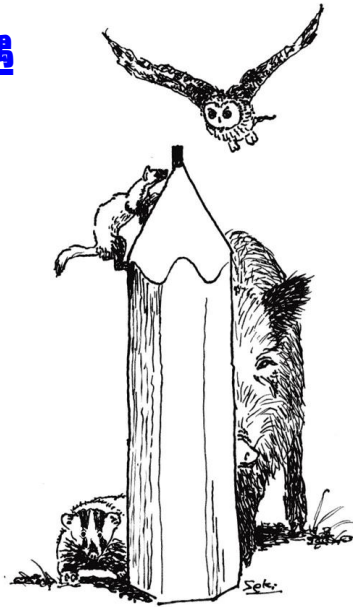
た工場で数か所(写真2)確認できた。心化前の卵のうを成体が見守っていることが多いようだ。卵のうを取ろうとすると逃げずに取り戻そうとした。その際、かまれる可能性があると感じた。だから、ハイイロゴケグモの成体がいるときは、近くに産んだばかりの卵のうがあるということだ。成体だけ駆除しても子グモが生まれることになるので、卵のうをつぶして確認する必要があることが分かった。

串間 研之(後半へ続く)



写真2 細島の倉庫(左)の消火栓の中の卵のう(左から2番目)、その扉の取手(右から2番目)消火栓の下にあった虫やカニを食べた残骸。糸で巻かれていない、理由は後半②で(右)

遭遇



三谷 綾香

私が通っていた大学は、そこそこ街中であるはずの岡山市内にもかかわらず、山の斜面に校舎を無理やり建てたような緑の生い茂るところでした。日中は運が良ければアナグマが道の向こうから歩いて来るのに遭遇したりしました。また、夜になるとテンやフクロウなどの夜行性の動物が活発に校内をうろついていました。そのため、夜遅くにゼミ室から帰宅する際は野生動物に出くわす確率が上がります。しかし、特に注意すべきはイノシシでした。年に一度は自転車に乗った学生と、藪から飛び出してきたイノシシが衝突し、学生が入院もの大怪我をしたなんていうメールが学校から回ってきます。また、子連れのイノシシに追いかけられた先輩方もいました。自分も一度、自転車で夜遅くに帰ろうとしたら2頭のイノシシと出くわしてしまい、血の気が引きました。動物園でイノシシを飼育担当していて、ときに彼らのパワフルな様子を見るとあの時のことを思い出します。人間ではとうてい敵わないようなあの自然の中で生きる力強さ、たくましさは、野生動物の最大の魅力のひとつではないでしょうか。

次回は、山田 美波さんをお願いします。

動物記録

2019年

- 6/11 台湾原産の特定外来生物「スウィンホーキノボリトカゲ」が日向市の沿岸部で大量繁殖していることが宮崎野生動物研究会会員でもある宮崎大学保田教授の調査で分かった。
- 6/17 延岡市北川町の北川湿原でこの湿原に78年間存在が分からなかったニッポンミズスマシの生息する可能性が高いことが大分昆虫同好会の調査で判明した。
- 6/21 宮崎市の住宅街でサルの出没が相次いでいることが報じられた。
- 6/23 宮崎市大炊田海岸で当研究会の調査でこれまで確認されていなかったアオウミガメの上陸産卵が初めて確認された。
- 7/16 県の絶滅危惧種オオハラビロトンボが川南町の川南湿原で3年ぶりに確認された。
- 7/23 宮崎昆虫調査研究会の岩崎会長が日本固有種のチョウ「ウラギンヒョウモン」の2新種が判明したを発表した。それぞれ、「ヤマウラギンヒョウモン」、「ヒメウラギンヒョウモン」と名付けた。新種判明は県内では44年ぶりと報じられた。
- 9/20 美郷の杉をシカの食害対策としてインターネット経由の監視を目指す実証実験が開始したと報じられた。
- 9/20 県は、日南市の油津港で県内8例目の特定外来生物「ハイロゴケグモ」を発見したと発表した。
- 10/12 串間市本城の田んぼに国の天然記念物のニホンコウノトリ4羽の飛来が確認された。足環が付いていた。
- 12/19 日南市西弁分の水田でニホンコウノトリ1羽が確認された。足環から10月に串間で発見された個体と判明した。
- 10/25 絶滅危惧種のクロツラヘラサギが宮崎佐土原町の一ツ瀬河口に14羽飛来しているのが確認された。

2020年

- 1/12 アフリカ原産の侵略的外来種のツヤオオズアリが宮崎市南部の住宅地に生息しているのが確認されたと報じられた。
- 1/13 串間市都井の諏訪浜沖で12日に打開く1年8か月ぶりにゴマフアザラシ「すわちゃん」とみられるアザラシが見つかったと報じられた。
- 1/18 都城市菓子野町でニホンコウノトリの目撃が相次いでいると報じられた。足環から昨年4月に兵庫県で生まれた雌だという事だ。
- 1/22 県南地域は生息域ではないとされていたシカの目撃が日南市の山林で相次いでいると報じられている。定点カメラでも確認されている。
- 5/8 新富の富田浜で本年初のアカウミガメが上陸産卵した。

## 野生研のあしあと

### 2019年

- 1/12 宮崎大学主催「青島とアカウミガメのこと」ワークショップを開催。 小学校低学年対象：ANAホリデーインリゾート宮崎にて
- 1/29 1 月度月例会開催
- 2/19 2 月度月例会開催
- 3/16・17 第 7 回九州ウミガメ連絡会（大分県佐伯）に当研究会から参加。
- 3/4 宮崎合同発表会に発表  
場所：宮崎県立図書館 県内の自然科学関係者「ゲンジボタルの発生頭数予想の方法」「アカウミガメのサンドバック護岸への本年度の上陸状況」
- 3/19 3 月度月例会開催
- 4/23 4 月度月例会開催
- 5/2 2019 年度理事会・総会を開催  
ウミガメ調査研修と準備。
- 5/18 シーガイアビーチクリーン活動に講師派遣
- 5/20 アカウミガメの上陸ならびに産卵等の本年度一斉調査開始
- 6/5 宮崎市立広瀬西小学校 4 年生対象に総合的な学習の時間「アカウミガメの保護について」講師派遣
- 6/15 カメサポ（宮崎オールトヨタ主催・当研究会協力）講師派遣 ビーチクリーン・講習会開催
- 6/18 6 月度月例会開催
- 6/28 青島「渚の交番にて」青島中学生対象にウミガメの講義を実施。 日本財団助成「海洋教育プロジェクト」
- 7/6 広瀬北小学校地域づくり協議会のウミガメ講習会に講師を派遣
- 7/17 石崎浜ビーチクリーン：地元の企業他によるボランティア活動  
宮崎海岸出張所依頼により講師派遣

- 7/22 公益社団法人社会貢献支援財団より第 52 回社会貢献者表彰を受賞
- 7/23 7 月度月例会開催
- 8/3 旭町児童館サマーキャンプにおけるウミガメ講話に講師派遣
- 8/10 全域一斉のアカウミガメの上陸産卵調査終了
- 8/22 8 月度月例会開催
- 8/25 こどもの国海岸で孵化調査観察会開催  
国富小、本郷小、本郷中の保護者と児童生徒、国土交通省宮崎河川事務所、宮崎県河川課、九州電力職員の親子を招いて実施した。 参加者 140 名ほど
- 9/18 9 月度月例会開催
- 10/13 本年度アカウミガメ調査報告会を開催  
調査期間を通し、小中学校、高等学校等のグループ見学会を実施。
- 10/19 第 3 回かめサポを開催(協力)
- 11 月 8 日～11 日 第 29 回日本ウミガメ会議に会員参加：鹿児島県与論島
- 11 月 特定外来種「ハイイロゴケグモの生息」調査報告書を宮崎県に提出
- 12 月 宮崎市のアカウミガメの調査報告書を宮崎市に提出

### 2020年

- 2 月 アカウミガメの調査報告書を宮崎県に報告
- 2 月 ニホンカモシカ調査報告を宮崎県に報告
- 3 月 RDB と外来種調査報告を宮崎県に提出
- 5 月 総会中止（コロナによる）
- 5/11 Web で理事会（Zoom で）
- 5/20 アカウミガメの上陸ならびに産卵等の本年度一斉調査開始



宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.49 2020年7月15日発行

特定非営利活動法人

宮崎野生動物研究会 (Miyazaki Wildlife Research Group)

代表 岩本 俊孝

<http://www.m-yaseiken.org>



フレンジーな子ガメ

「わいるどらいふ」の無断引用、転載、複製を禁止します。